

論壇

徹底的に英語を鍛える

私事で恐縮だが、私は24年間教鞭をとった東京大学を離れて、4月から学習院大学の新学部教授となった。新学部の名称は国際社会科学部という。この名称からもその内容はおよそ想像できるだろうが、それについて少し説明することで、大学教育の新しい姿について考える機会を提供できるのではないかと考えている。

学習院のこの新学部では、学生は徹底して英語のスキルを鍛えられることになる。専任教員の半数は英語教育の専門家である。米国

伊藤 元重 学習院大教授(国際経済学)

やカナダなどの外国人も多い。プログラムの最初の2年で徹底して英語力を鍛えられる。会話やヒアリングにとどまらず、英語でプレゼンテーションや討議をするなど、社会で活躍するのに必要な英語力を学ぶことになる。

残りの半分の専任教員は私のような社会科学の専門家である。経済学、法律、経営・会計、社会学、地理学など、様々な専門家から構成されている。学生はそこで社会科学の考え方の基本を幅広く学ぶことができる。

哲学や文学まで含めて一般的な教養を大学時代に幅広く学ぶことをリベラルアーツという。学習院

のプログラムは、それよりも社会科学に集中している。一般教養よりは専門化しているが、経済学や法学というような特定の個別分野に狭めたものでもない。

多くの学生が大学卒業後に社会で活躍するには、縦割りになった特定の分野だけ学ぶよりも、社会科学全般の広い知識を持った方が

よいと考えるからだ。哲学、文学、歴史なども一般教養として学びたいければ、教養講座として提供されている他学部の講義をとればよい。

こうした英語の能力と社会科学の基礎知識を身につけた学生は、3年から次のステージに移ることに

新学部と大学教育

になる。それまで日本語で提供されていた社会科学の講義が、3年生以上では英語の講義に変わる。学生は英語で講義を聴いて、社会科学の知識をさらに広げることが求められる。

国際的能力身につけて

社会に出て国際的な仕事に就くと思えば、経済でも法律でも英語でのコミュニケーションが求められる。社会科学を英語で学ぶことの意義は大きい。それだけでは

ない。英語の勉強のためだけの英語のクラスに比べて、英語で経済学や法律を学ぶことは、英語の能力をさらに高めるはずだ。教室の英語を越えて、実践の英語に近づくとになる。

そして学生にも一つ求められることは、留学である。人によって期間の長さには違いはあるかもしれないが、すべての学生が卒業までに留学することを求められる。そのために、学部のスタッフが海外の大学との交換プログラムを多く準備している。

このような構想で生まれた新しい学部である。その成果についてはまだ未知の面が多いが、国際社会の中では、学習院のこの新学部が打ち出したような考え方の大学学部がもっと多く必要であると思つ。大学レベルの教養をどう身につけるのか、そしてそれを日本語の世界だけではなく、グローバルなコミュニケーション能力とともに身につけてほしいのだ。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。